**平和統一運動次世代リーダー育成のための**

**「私から始まる平和統一大賞」青年スピーチ部門及びエッセイ応募原稿フォーマット**

**■「私から始まる平和統一大賞」とは**

　朝鮮戦争によって分断された朝鮮半島と在日コリアン。先人たちが夢にまで見た「統一」はいつ来るのでしょうか？　最近の国家情勢で考えると問題があまりにも大きく見えて、何から手を付けて良いのか、わからなくなってしまうことはありませんか。しかし、皆さんが「心の壁」を乗り越えた小さな体験が、何かしら在日同胞の和合に役に立った事はなかったでしょうか？

　’為に生きる’神様主義の真の愛を根本精神として国籍と思想、組織を超越して、国内外の韓民族の和合と統一の実現を目指す平和統一聯合は、この度、皆様の「心の壁」を乗り越えた経験を、同世代や後に続いていく世代の力とするために、創設20周年記念企画としてこの賞を創設いたしました。

|  |  |
| --- | --- |
| 名称 | 「私から始まる平和統一大賞」青年スピーチ部門、会員及び一般部門　エッセイ募集 |
| 募集テーマ | 「私の心の壁を越えて始まった平和統一の経験」  ・自分の置かれている環境でぶつかった「心の壁」、なぜそれが「壁」であったか、どのようにして乗り越えたか、そのきっかけや周りからの言葉、勉強になったと思う自分の経験、そしてそれが在日同胞の和合、朝鮮半島の平和統一にどのように発展していく可能性があるかをスピーチ、または記述。 |
| 応募条件 | 平和統一聯合に所属している会員、担当者。または左記から紹介を受けた方。 |
| 募集期間 | 青年スピーチ部門：2024年６月16日（日）まで地方予選  会員及び一般部門　エッセイ募集：  2024年４月１日（月）～2024年６月17日（月） |
| スピーチ  原稿規程 | 【青年スピーチ部門】　５分以上７分以内（制限時間を超過した場合は減点）。  ※パワーポイント使用可。  【会員及び一般部門　エッセイ募集】800字以上3000字以内、１人１点。  ※両部門とも主となる言語を日本語で行うこと。部分的に韓国・朝鮮語、または他国の言語を使用しても良いが、日本語の意味を付け加えること。 |
| 応募方法 | Wordファイルのまま、応募フォームよりご応募ください。※ 青年スピーチ部門に応募の方も、同様に原稿を提出してください。 郵送、FAXでのご応募はご遠慮いただいております。 |
| 発表 | 2024年6月下旬　ホームページにて公開  入賞者には、メールまたはお電話にて直接ご連絡をさしあげます。  青年スピーチ部門の大賞受賞者は、７月４日東京都内の記念行事でスピーチします。その交通費は本部負担。 |

**題名：　私から始まる平和統一**

**お名前：　釘澤由美**

(下記より本文をご記入ください)

私は小さな町で、夫と韓国料理店を経営している。経営といってもテーブルが５席しかない、これまた小さな店だが、夫婦2人なんとかやりくりしている。初めは韓国好きな女性のお客様が多かったが、10年も過ぎるとお客様の子供さん、その子供さん…と３代で来て下さる方々も増えた。店のアルバイトの学生さん達は学校を卒業したら辞めてしまうのだが、就職して彼氏を連れて来たり、家族に御馳走するのだとお金を払っていく姿を見ると私が心満たされるようだ。

好奇心旺盛で明るく、素朴だがさりげなく優しいこの地域の人々に、私達は心から感謝している。

　ある日、８０代だと思える男性のお客様が、お食事の帰りに話をしてくれた。「私は北朝鮮から来たんだよ。」日本の支配下にあった当時の韓半島で、ご両親と暮らしていたが引き揚げて来られたとの事だった。告白するようにひそかに話をされて、私はこの方の苦労されたであろう歳月を思って胸がジーンと来たが、その後来られる度に同じ話をされるので、次第に「ああ、そうですか。」と軽く受け留め話をそらしたりするようになった。

韓国人の夫が作る料理は、昔ながらの味がする。料理上手だった母の腕を受け継いだのか、手間暇をかけ、また地域の人の口に合うように作っている。韓国人のお客様に、「昔、葬式場で食べたユッケジャンの味がする。」と言われた時は笑ってしまった。

そんな夫に「早く韓半島が統一されるといいね。」と言うと、「そんな事は俺が生きている間はないよ。」と返される。おそらく多くの韓国人が同じ考えだと思う。いつか南北統一が実現するかもしれないが、難しいだろう・・・というのが一般的な意見だし、若い人達の中には、統一する必要があるのか？しなければならないのか？と言う人もいるという。分断の悲劇を経験した世代がこの世を去って行き、競争社会の中で必死に生きている現代の韓国人にとって、南北統一は夢にも見れない事なのだろう。

私の家庭の中でも境界線がある。日本と韓国の国境線だ。夫は今はすっかり日本に溶け込み、私以上に充実した毎日を過ごしているが、それには長い年月が掛かった。

結婚が決まり、さてどちらの国で生活しましょうか？となった時のこと。私は当時小さな商社に勤めていて、韓国人の社長は「日本に旦那さんを呼びなさい。一緒にここで働いたらいいじゃない！」と喜んでそう言ってくれたが、夫に「年老いた母の面倒をみなければ」と説得され、韓国の農村で暮らすことになった。しかし実際は、何の因果か７０歳を過ぎて、何も知らない外国人の嫁と同居する事になった母が、私達の面倒をみることになった。母は文字の読み書きも出来なかったが、賢く勘のいい人で、すぐに私のヘンテコな韓国語を家族や村の人達に通訳するようになった。働き者で面倒見が良い母と、経済力のある兄達のバックのおかげで、私は村の中で一応大事にされていた。

村の生活はプライバシーがなかった。夜に夫と夫婦ゲンカでもしようものなら、次の日のお昼にはそこら中に知れ渡っていた。バス停でバスを待っていたら、車が停まり知らない男性に「町に行くんでしょ？乗んなさい。」と言われ、まあこんな村で事件もないだろうと乗せてもらったら、夫の父が亡くなった時どんな遺言を遺したか、父がどれ程人情味のある人だったかとくとくと話をされて、この人一体何者？っていうか何故私の家族構成まで知ってるの！と思った覚えがある。

ある日、ビニールハウスで花を作っている農家に呼ばれ、出荷の手伝いをする事になった。村の女性たちが何人も来ていたが、そこに以前から何故か私に突っかかってくる女性がいた。彼女は幼い子供を連れて家に来ては、母にお菓子や果物を貰っていた。そして私の姿が見えないと、どうしているのか、何かやらかしてないかと探りを入れていた。まあ、それは彼女に限った事ではなかったけど。

作業をしながら彼女が切り出した。「昨日テレビ見た？マルタの事やってたよ。」マルタとは、戦時中日本軍が人体実験をしていたという事だ。その特集がテレビで放送されたらしい。

「ひどいよね。人間がよくあんな事できるよね。」女性たちが話す声が、もちろん私にも聞こえてきた。胸が痛んだが、当然耐えなければいけない歴史の事実だと冷静にとらえようとした・・・のに、すさまじく涙があふれた。私が泣いているのではなく、私の背後で誰かが泣いているようだった。嗚咽している私に気付き、皆の声が止んだ。「すみません」と言って、私は作業もそこそこにビニールハウスを出て家に逃げ帰った。悲しさと恥ずかしさ、胸の苦しみを抱えて1人で部屋に座っていたら、夫が隣の奥さんを連れて入ってきた。この奥さんは私達と年が近く、いつも親身になってくれるお姉さんのような人で、熱心なクリスチャンだった。2人は「歴史上の事はしかたがないんだよ。」と慰めてくれ、私に外に出るよう促した。

なんと家の前には、母も含め大勢の村の人々が集まっていた。お年寄りから若い夫婦、子供たちもいた。皆、私が出てくるのを待っていたのに、私の様子を見に来てくれたのは確かなのに、今日あった事には触れず、穏やかな笑顔でたわいもない事を話したり、ふざけあったりしていた。その時の言葉では言い表せない感情、有難さと申し訳なさ、愛に包まれたあの場面が、今も切なく心に刻まれている。

平和統一の始まりは形ではないと思う。力でも、経済でも、言葉でもない。

人は誰にも事情があり、歴史があり、傷があり、信条、信念、信仰がある。それは国家も同様だ。それを越えて抱き合う心、共鳴し合える心を人間は神様から与えられていると、私は信じているし知っている。

後日、村の人達にネイルアートをしてあげた事があった。とても簡単なものだったが、皆喜んでお互いの爪を見せ合っていた。そこには例の、何故か私に突っかかってくる彼女もいて、当然のように手を差し出して来た。

おしゃれでも平和な統一は出来るのかもしれない。

今、私達の店には、共産党のお客様もいる。市政だよりを見て市議会議員さんだったことを知り、ちょっと驚いた。私の夫は、朝鮮戦争後のまだ貧しい時代に生まれ育ち、共産主義と言えばうんざり、という人だが、家族で食事に来て下さっているこの方に、まさか「来ないで」とは言わない。

コロナパンデミック後、北朝鮮から来たというあのおじいさんを見かけないようだ。秘密を打ち明けて、少しはにかんだようなあの笑顔をまた見たいと思う。